

中学校第3学年実践事例

1 単元名 政府の役割と国民の福祉 「政府の役割と財政の課題」

2 「主体的・協働的に学び、次代を創り出す生徒」を育てるために

- (1) 「見方・考え方」を広げ、深めさせるために、協働の話し合い活動の設定と思考を可視化する場を設定する。
(手だて1)
- (2) 専門家や関係諸機関(財務省)との連携・協働を図り、社会との関わりを意識した課題を追究したり、解決したりする活動を充実させる。
(手だて2)
- (3) 社会参画の実践力と主権者意識を高めるために、考察したことや構想したことを説明したり、議論したりする場と主体的な振り返りの場を設定する。
(手だて3)

3 本時の学習指導

(1) 本時のねらい

「100人の村」の財源の確保と配分について、効率と公正の視点から考察するとともに、考察したことを説明したり、議論したりすることができる。

(2) 学習過程

学習活動・予想される生徒の反応	時間	◎主な支援・留意点 ●評価<方法>
1 課題を把握する。 (1)前時の学習内容を振り返る。 (2)予算案のコンセプトを発表する。 (3)課題を再確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 財源をどのように確保し、どのように配分すればよいだろうか？ ～よりよい村にするために、村役員として予算を編成しよう！～ </div>	8	◎税理士と財務省職員の講義を聴くことで、本時の課題を主体的にとらえさせる。また、課題追究の際の「視点や方法」をとらえさせる。(手だて2) ◎「日本村の様子」と「日本村のお財布状況」の資料から日本村の現状と課題を確認する。 ◎前時に考えた予算案のコンセプトを発表させる。
2 課題に対する考えを主張する。 (1)班でお互いの考えを主張し合う。 ・少子高齢化対策として教育費を増額する。 ・地方交付税交付金を増額する。 (2)主張をすり合わせ、方向性を定める。	30	◎班としての予算案の方向性やねらいを設定させる。 ◎課題追究の視点や方法を再提示する(第1段階) ・日本村の現状と課題 ・現代社会の特色
3 協働的に追究し、合意形成を目指す。 (1)班としての主張の根拠や課題をタブレット端末を操作しながら話し合う。 (2)班を3回移動し、考察したことを説明したり議論したりして考えを深める。 (3)元の班で再度話し合いをもつ。また、代表の発表により、重点化した点や最も議論になった点の共有を全体で図る。 ・他の班の発表を傾聴し、考えを深める。		◎村民の立場も含めて話し合い、タブレット端末で予算を操作・変動させながら考察させる。(手だて1) ◎説明したり、議論したりして考えを深めさせるためにワールド・カフェ方式を採用する。(手だて3) ◎課題追究の視点や方法を再提示する(第2段階) ・合意形成の妥当性→望ましい配分 効率と公正 ・持続可能性 ・複数の立場や意見 ●意欲的に説明したり、議論したりしている。<観察>
4 課題をまとめる。 (1)多面的・多角的な見方によって深めた考察を基に、論拠を明らかにして自己の主張をまとめる。 (2)学習を振り返り、自己評価をする。	12	◎他者の主張や資料を基に、多様な視点から論拠を明らかにして考えをまとめることができる。 <観察・ノート> ◎見方・考え方の深まりや変容、身に付けた力を確認させるために主体的な振り返りを行わせる。(手だて3)

4 授業で見とりたい「主体的・協働的に学び、次代を創り出す生徒」生徒の姿

- 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多様な視点から考察する姿。
- 自ら課題を見出し、複数の立場や意見を踏まえて構想する姿
- 考察したことや構想したことを基に、説明したり、議論したりする姿。

5 多様な視点から現状と課題を分析するための資料

1. 日本村の様子

① 村の人口(100人)について

(性別) 村人100人のうち、男性49人、女性51人です。

(年齢) 村人100人のうち、子ども13人、働き手は60人、お年寄りは27人です。
村人のうち、小学生は5人、中学生は3人、高校生は3人、大学生は2人です。

(場所) 村人100人のうち、50人は人や会社の多い集落に住んでいます。

(職業) 村人100人のうち、
⇒3人は学校の先生や警察官など、地方の役場
⇒1人は自衛官や村の役員を支える職員として、中央の役場で働いています。

③ 村の良い所(治安、医療、教育等)について

- 村は他の村と比べても、とても安全な村です。
⇒1年間に事件に巻き込まれるのは、100人のうち、1人です。
- 村は、医療が発達していて、村人皆で助け合っているのので、病氣や怪我になっても安心お金で、病院の先生に診てもらえます。
- 村では、人の数が少なくて豊かではない集落に住んでいても、同じ公共サービスが、受けられるよう工夫を行っています。
(東京でも、沖縄でも、同じように警察官が守ってくれる。)
- 村では、年を取って働けなくなっても、村人みんなで助け合っているのので、若いころからちゃんと村の会費を納めていた村人は、生活に必要なお金を年金として受け取ることが出来ます。
- 村が運営している小学校と中学校には、タダで通うことが出来ます。保育園や幼稚園、高校や大学も、村の子どもが安く通えるように、村が支援しています。

② 村の1年間の稼ぎ(540万円)について

- 村人と村の会社を併せて、村全体で毎年540万円を稼いでいます。
- 村は、アメリカ村と中国村に続いて、世界で3番目にたくさんのお金を稼ぐことのできる村です。
- 村は、昔から自動車を作ったりするのが盛んでしたが、最近は村人に対してインターネット・サービスや配達サービスを提供するサービス業が盛んです。
- 村のお財布状況は厳しいですが、それを改善するためには、1年間の稼ぎをどうやって増やしていくのかも、とても重要な問題です。

【村の稼ぎを増やすための取組み】

- 村では、ロボットや人工知能、車の自動運転などの新しい技術開発を進めようとしています。
- 子育て・介護の環境を整えたり、若者への支援を拡充したり、村人の働き方を改革したりすることで、村人皆が活躍できる社会を目指しています。

④ 村の課題(少子高齢化、人口減少)について

- 村では、毎年の生まれる子どもが少なくなっています。そのため、今の人口が、2050年には80人に減ってしまいます。

子どもの人数は、	13人	⇒	9人
大人(働き手)の人数は、	60人	⇒	42人
お年寄りの人数は、	27人	⇒	29人

- 人口が減って、大人も減ってしまった後に、村全体で毎年540万円も稼げるのか、これまで充実していた医療や教育などのサービスを受けられるのか、村人は心配しています。

2017年

2050年

6 予算を編成する上で、比較・関連・検討が必要な資料

2. 日本村のお財布状況

① 村の去年の予算(100万円)について

村の1年間の支出を「歳出」、収入を「歳入」といい、この歳入と歳出の計画を「予算」といいます。村の去年の予算は、総額で100万円となっています。

【歳出】

歳出総額 100万円

- 借金返済 24万円
- 社会保障 33万円
- その他 10万円
- 科学技術 2万円
- 教育 4万円
- 防衛 5万円
- 公共事業 6万円
- 地方交付金 16万円

【歳入】

歳入総額 100万円

- 新たな借金(国債) 35万円
- 所得税 18万円
- 消費税 18万円
- 法人税 13万円
- ガソリン税等 11万円
- 税以外 5万円

② 村の歳出と税収の推移

平成以降、歳出と税収の差が特に拡大し、借金が増加してきています。歳出と税収の推移が口を開いたワニに見えるため、「ワニ口グラフ」と呼ばれています。

お金を使い過ぎ?
お金を集めなさすぎ?

③ 村の借金総額の推移

毎年借金を続けた結果、村の借金は急速に積み上がっています。

村の借金 888万円

④ 他の村と比べて見ると...

借金の水準(村の借金総額÷経済規模)は、他の村と比べてもひどい状況に。

村全体で一年間に稼ぐお金がいっぱい多い

- 日本村
- アメリカ村
- フランス村
- イギリス村
- ドイツ村

7 実践の考察

本授業は福島県内の中学校では初となった「財政教育プログラム」の授業（財務省と連携・協働した、人口100人の日本村の予算案づくり）である。新学習指導要領の内容の取り扱いにも明記されているように、専門家（税理士）や関係諸機関（財務省）と連携・協働を図り、社会との関わりを意識した課題を追究したり、解決したりする活動を充実させることで、社会に参画する実践意欲に結びつけて主権者意識を高めたいと考えた。

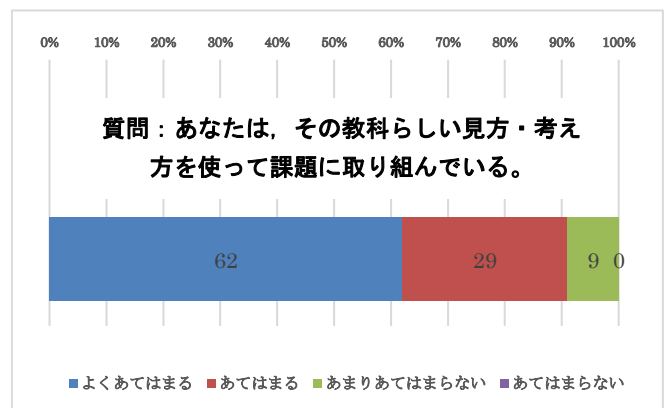
まず、2つの資料と予算編成の手引きをもとに、多様な視点から自己の主張（予算案）をつくり、ホームグループでの予算編成会議と、ワールドカフェ方式による3回の住民説明会を通して、予算案の合意形成を図った。タブレット端末を活用した予算編成会議や、立場を決めて、考察したことや構想したことを説明したり、議論したりするワールドカフェ方式は、生徒の思考を促し、考えを深めていくのに有効であった。また、ワールドカフェ方式は、生徒に好評であり、学び合いを楽しむ姿が見られたのも大きな成果であった。

専門家（税理士）や関係諸機関（財務省）と連携・協働を図りながら授業を構想することは、社会との関わりを意識した課題を追究したり、解決したりする活動を充実させる上で有効であり、継続していくことが大切であると強く実感した。専門家や関係諸機関と連携・協働して教材を開発したり、授業を構想したりすることには、時間と労力を要するが、多様な視点から考察する社会科の授業づくりには専門家や関係諸機関の視点も必要不可欠である。

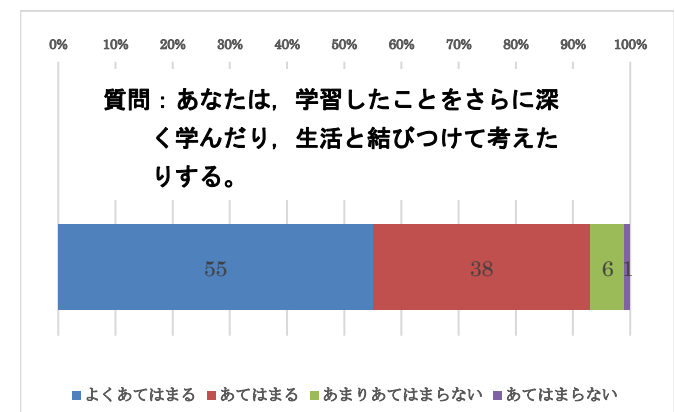
以下は本授業における生徒の話し合い活動の様子とアンケートの結果である。



〈自己の主張と資料を基にしたホームグループでの予算編成会議〉



〈タブレットを用いたワールドカフェによる住民への予算説明会〉



今年度の授業実践を通して、考察したことや構想したことを説明したり、議論したり、討論したりすることで、自分の考えを広めたり、深めたり、変容させたり、今まで気づかなかった新しい考え方に気づくことができた生徒が多くなった。

しかし、一過性の気付きで終わらないようにさせたい。よりよい社会を築いていく熱意と協力の態度が、実社会に出てからも発揮できるように主権者教育に取り組んでいきたい。